

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 17 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380844

研究課題名(和文) 親密な関係における暴力の発生規定因と暴力に対する態度

研究課題名(英文) Intimate partner violence and its correlates: How did it happen and how do people perceive it?

研究代表者

森永 康子 (Morinaga, Yasuko)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：60203999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：配偶者や交際相手からの暴力を親密な関係における暴力(IPV)と呼ぶ。本研究は、個人のどのような特性や態度がIPVの発生や暴力の認識に関わっているのかを検討した。また、暴力と関連するものとして戦争に対する態度についても検討した。その結果、男性の場合、男らしさよりも自分のことをどのくらい道徳的だと思うかということや社会の上下関係に対する態度のほうが暴力についての態度と関連するのではないかと示唆が得られた。また、暴力容認の背景には、ジェンダー・ステレオタイプ(男らしさや女らしさについての思い込み)や自分が望ましい特性をもっているという認知が関連することも示唆された。

研究成果の概要(英文)：A series of empirical studies has been conducted to investigate how people, especially adults men, perceive intimate partner violence (IPV) including victim blames. Attitudes toward war (ATW) were also examined. Results suggested that moral identity (i.e., how high morality people think they have) and attitudes toward intergroup relationships (i.e., to what extent people agree with dominance of one group over the other) were more likely to predict perception of IPV and ATW than participants' masculinities. Results also suggested that gender stereotypes (i.e., social norms about what men and women should be or how they should behave) and biased perception about oneself (i.e., perceiving his/her own morality or objectivity higher than actual ones) could be the process behind of accepting violence.

研究分野：社会心理学

キーワード：ジェンダー 親密な関係における暴力 ステレオタイプ 被害者非難

1. 研究開始当初の背景

配偶者からの暴力や交際相手からの暴力をあわせて親密な関係における暴力 (Intimate Partner Violence: IPV) と呼ぶ。IPV は夫妻の 25% , 交際中の男女で 10~30% 程度発生していることが報告されており (内閣府, 2012 など) , 深刻な問題として認識されるようになった。こうした IPV に関する心理学的研究の歴史が長い米国では, 被害者支援以外にも, IPV の発生の規定因に関する社会心理学的な研究も行われている。これらの研究から IPV の発生には個人の性別役割態度や支配的傾向, 対人関係スキル, 両親の関係などがかかわっていることが示されてきた (Frieze, 2005 など) 。日本でも心理学的研究が行われるようになったが, その多くは被害の実態調査, 被害者の支援やカウンセリングにかかわるものであり, IPV の発生にどのような要因がかかわっているのかという社会心理学的研究はまだそれほどない。

こうした中で研究代表者は 2007 年から, 米国, 台湾, 韓国, 中国, ベトナムの研究者と協力し, IPV に関する国際比較を行ってきた。これらの研究では大学生を対象にして,

加害及び被害の経験と性別役割態度などの心理学的変数との関連, シナリオ法 (IPV が生じている仮想場面を提示し回答を求める方法) を用いた暴力の責任帰属認知についての検討を行った。その結果, 大学生はそれほど暴力をふるったりはしないものの, 性別役割態度や相手への情熱的な愛情, 両親のけんかの目撃により加害者となる傾向が高いこと, 言語的な暴力に限れば男性よりも女性の方が加害の頻度が高いこと, 相互に暴力をふるうカップルが存在していること (Morinaga et al., 2011 など) , また, 国によって暴力の責任帰属が異なるものの, いずれの国も女性被害者に暴力の責任を帰属する傾向と性別役割態度が関連すること (Nguyen et al., 2014 など) などを見いだした。

しかしながら, これらの研究は国際比較を主としたものであり, 翻訳の等価性の問題のため, 暴力の測度が日本での IPV の実態に即していなかったり (森永, 2013) , IPV に関わるとされるさまざまな要因を詳細に検討できなかった。さらに, 調査対象も IPV がそれほど見られない大学生に限定せざるを得なかった。このように調査対象者, 暴力の測度, IPV の発生に関わる要因のいずれについても, 日本においてさらに検討することが必要とされていた。

また, IPV の発生には, IPV を容認する態度やそれに関わる社会規範など, 当事者を取りまく社会の影響も大きい。この点について, 研究代表者は海外の共同研究者とともに軍事行動, 死刑, 体罰といった暴力全般に対する態度を測定し, 学会発表等で報告を行ってきた (Cheng et al., 2012; Morinaga et al., 2013 など) 。こうした態度は IPV の発生に関係する社会的要因として考えられる。ま

た, IPV をはじめ戦時性暴力や近親姦などでは女性が被害者になることが多く, 「ジェンダーに基づく暴力 (GVB: Gender Based Violence)」と呼ばれている。女性が被害者となることが多い IPV を理解するためには, 性の二重規範, 政治や経済面における男女格差, 性暴力に関する言説などをふまえる必要がある。IPV を当事者だけの問題にとどめずに, 社会問題として捉えるためには, 以上のような暴力全般に対する態度や GBV に関する要素をとりいれた検討が必要である。

2. 研究の目的

以上のような背景をもとに, 本研究では以下の 2 点について検討することを目的とした。

(1) 暴力認知にかかわる要因についての検討

IPV 発生の背景にあると考えられる IPV に対する認知や態度およびそれらに関連する心理学的要因についての検討を行う。また, GBV の中でも, 戦争に対する態度 (Attitudes toward War: ATW) をとりあげ, IPV と同様に, ATW と関連する心理学的要因についての検討を行う。本研究でとりあげた心理学的要因は, 自己観, 対人関係の多様性, 男性性, 自尊心, 好意的性差別態度, 道徳基盤, 社会的支配志向性などである。

(2) 暴力発生や容認の背景にある心理学的メカニズムの検討

IPV の加害者が常に暴力的であるとは限らない。ある特定の状況で暴力をふるうようになるのではないだろうか。これまでの IPV 研究ではこうした状況要因をあまり検討してこなかった。暴力の発生や容認の背景にある心理学的なメカニズムを探るためには, こうした状況要因を探ることが必要であろう。本研究では, 異性の存在や自己客観性の知覚を取り上げて検討した。

3. 研究の方法

主に以下の 2 つの方法を用いた。

(1) 調査的方法: IPV あるいは戦争に対する態度とそれに関連する心理学的変数への回答を求め, その両者の関係を検討した。

(2) 実験的方法: 実験操作により, 参加者を何らかの状態におき, その後に従属変数を測定し, 条件間の差異を検討した。主に, IPV の背景にある心理学的メカニズムについての検討のために用いた。

なお, IPV に関する態度や行動の測定は, 暴力と認識する範囲を尋ねる方法と IPV の場面を描いたシナリオを用意し, 被害者である妻をどのくらい非難するかを尋ねるという方法によって行なった。用いたシナリオのあらすじ: 妻が遊びに行っている間に夫が家事育児を行い, 夜遅く妻が家に戻った時, 怒った夫が妻を殴ってしまった。

また, ATW は研究代表者による過去の研究で用いた暴力に対する態度尺度 (Velicer et al., 1989) の中から, 戦争に関連する項目を用いて測定した。項目例: 「戦争が正しいこ

ともある」「自己防衛のための戦争は完全に正当である」。

4. 研究成果

(1)IPV 認知に関連する心理学的要因の検討

自己観と知覚されたサポート

IPV は、殴る蹴るなどの身体的な暴力、メールの監視や生活費を渡さないなどの社会経済的暴力、性的行為の強要に代表される性的暴力に分けることができる。成人男女(20~60代)を対象とし、これらの行為を暴力とみなすかどうかという点で性差が見られるかについて検討した。その結果、社会経済的暴力や性的暴力については男性の方が暴力と認知する傾向が低いことが見出された。

さらに、男性の IPV 認知と自己観(関係自己、相互独立的自己観、相互協調的自己観、排除回避傾向)、知覚されたサポートとの関連についての検討から、関係自己のみが IPV 認知と関連することが示された。つまり、身近な他者との関係によって自己を規定している男性ほど暴力認知が強くなる(どのような場合でも暴力だと認識するようになる)ことが見出され、IPV 認知には他者との関係が重要であることが示唆された。

道徳性と支配性

IPV で有罪になった男性の道徳性得点が比較対照群よりも高いという海外の研究報告 (Vecina et al., 2015) から、男性の道徳自認(自分のことを道徳的な人間だと思うか)が IPV に関連するのではないかという示唆を得て、これについて検討した。また、男性の女性に対する暴力は性的な欲求に基づくものではなく、女性に対する支配の表出であるという従来の言説をもとに、集団間の支配-服従関係についての態度(社会的支配志向性; Pratto et al., 1994)も加えて検討した。30代の男性を対象に IPV シナリオを用いて検討したところ、自分を道徳的だと思っている男性は被害者非難をしやすいという結果が得られ、道徳自認が高い男性が IPV を容認する傾向をもつことが示唆された。また、道徳自認の高低により、社会的支配志向性の影響が異なる傾向も見られた。従来の研究では、自尊心や性役割態度などの個人特性が IPV 容認を規定することが示されてきたが、この研究では社会的に望ましいとされる道徳性が暴力容認につながる可能性を示唆した。

自尊心と好意的性差別態度

女子中高生を対象にした IPV に対する認識に関する研究はあまり行われていない。そこで、中高生向けの IPV 認識を尋ねる項目を作成した上で、自尊心や好意的性差別態度(benevolent sexism)との関連を検討した。好意的性差別態度とは、男女は異なっているので、お互いに補い合うものであり、女性は保護すべき存在であるという態度である(Glick & Fiske, 1997 など)。一見ポジティブな態度に見えるが、その背景には女性は男性よりも弱く劣った者という性差別的な態

度があると言われている。IPV 認知の項目は「その人が苦しむくらいなら、私自身が苦しんだほうがましだ」といった自己犠牲的愛情と「その人が私に暴力をふるっても、私のことを好きなら許してあげる」といった暴力という2つの因子に分かれること、中高生の IPV の認知は好意的性差別態度とは関係せず、自尊心が高いほど IPV を否定することが示された。しかし、自尊心が高いほど好意的性差別態度を強く持っており、女子中高生は、男女は相補的であることや女性を保護する対象としてみるといった態度を好ましいものとして認知している可能性が示唆された。IPV 認知がどのように発達的に変化するのかについての検討の必要性も示唆された。

(2)ATW に関連する心理学的要因の検討

男らしさと対人関係

戦争と男らしさを結びつける言説は多いが、日本において ATW と男らしさの関連について社会心理学の立場から検討した研究はほとんどない。そこで、男らしさについて複数の指標(性別役割観、不安定な男らしさ、男らしさの重要性)を用い、成人男女(30代と50代)を対象に、ATW との関連について検討した。また、その際、IPV の暴力認知には他者との関係が関連するという(1)-の結果をもとに、対人関係の多様性の指標も含めて検討した。その結果、女性よりも男性のほうが戦争に対して肯定的な態度をもっていたが、この性差は男らしさの指標によっては説明されなかった。また、世代や性別によって ATW を規定する男らしさが異なっており、一貫した説明はできなかった。さらに、50代男性のみにおいて所属している地域のグループ数が多いほど、他者への関心が高まり、そのことで戦争に対して否定的な態度をとるようになること示された。この研究では性別や年代を通して ATW の差異を説明できる男らしさとの内容が明確にならず、他の要因について検討する必要性が示された。

道徳基盤、社会的支配志向性、公正世界観

(2)-の結果をもとに、30代男性の ATW に関連する要因として、倫理的判断の際に重要とされる5つの道徳基盤(危害、公平、忠誠、権威、神聖; Graham et al., 2009)と社会的支配志向性をとりあげて検討した。道徳基盤は所属集団内で受け入れられる(排斥されない)ためのものであり、社会的支配志向性は所属する集団と他の集団との上下関係に対する態度である。30代男性を対象に検討した結果、まず、ATW を2つ(武力の必要性和戦争の正当性)に分けた方がよいこと、道徳基盤のうち、公平(他者を公平に扱っているかどうか)が倫理判断の際に重要であるとするものが武力の必要性にかかわり、危害(他者に危害を与えたかどうか)が戦争の正当性に関係することが示された。また、社会的支配志向性は ATW のいずれの側面にも影響することが示された。所属集団への適応のための仕組

みと考えられている道徳的基盤が集団間の戦いについての態度に関連するメカニズムについて検討することの必要性が示唆された。

また、成人男女(20歳-70歳)を対象に、道徳基盤、社会的支配志向性に加えて、公正世界信念(Lerner, 1980)とATWの関連についても検討した。公正世界信念とは、「頑張れば報われる」「悪いことをすれば罰が与えられる」のように世界が公正にできているという信念である。この調査では道徳基盤を個人的な道徳性と集団を結び付けるための道徳性の2つに分けた。検討の結果、戦争が正当かどうかの判断には道徳性が、武力の必要性(自国を守るかどうか)についての判断には社会的支配志向性に関連するが、公正世界信念はATWの両側面と強く結びついていることが示唆された。ATWは自分を取り巻く世界をどのように知覚しているのかとも関連することが示されたと言えよう。今後は世界観への脅威が与えられるような状況で戦争に対する認知がどのように変化するかといった検討も必要であろう。

(3) 暴力発生や容認の背景にある心理学的メカニズムの検討

社会的比較の効果

IPV発生には男性性がかかわることが従来から示唆されてきた。そこで言及される男性性は、多くの場合、個人の中で安定した特性を意味することが多い。一方、男性性や女性性は個人の持っている特性ではなく、その場におかれた状況の影響を受けて、知識として持っているジェンダー・ステレオタイプが表出されるもの(doing gender)という主張がある(West & Zimmerman, 1987)。後者の立場に関する社会心理学的な研究には、社会的比較理論をもとに、異性(vs.同性)と比較することで、男性は自分の男性性をより高く認知し、女性は自分の女性性をより高く認知するというものがある(Guimond et al., 2006)。この主張に基づき、男女大学生を対象に検討したところ、男性は、同性比較条件よりも異性比較条件で、女性性の得点が低かった(自分を女性性が低いと認知していた)。さらに、この結果は、社会的支配志向性のうちの平等主義尺度の得点が低い者(平等主義に反対する者)において見られた。このように、男らしさや女らしさは安定した特性というよりも、状況によって男らしさや女らしさについてのステレオタイプが引き出されたものであると考えられる。この結果は、IPVが生じるような環境は、自分の男らしさを高く認知する(あるいは、自分の女らしさを低く認知すること)に結びつくがゆえに、そのような状況の中である一部の男性は暴力に訴える必要性を感じる可能性を示唆するものである。

客観性の効果

上述の(1)-では、自分を道徳的だと認知

している男性は暴力を容認する傾向が見られることが示唆された。社会心理学の研究見の一つに、自分が社会的に望ましい特性をもっていると認知することにより、社会的に望ましくない行動をとることが許されるという認知(licensing)が生じることが示されてきた(Miller & Effron, 2010など)。望ましいと認知される特性の一つに客観性があり、男性に自己客観性の知覚が生じると、雇用場面で女性を差別するようになるということが報告されている(Uhlmann & Cohen, 2007)。なお、ここでの自己客観性とは、「私は客観的である」といった質問に答えることで、自己と客観性の連合が活性化され、アクセシビリティが高まった状態であると定義される。IPVや戦争への肯定的な態度の背景に自分は物事を客観的に見ているという思い込みがあるのではないかと考えられる。そこで、自己客観性の効果を確認するため、男子大学生を対象に、Uhlmannらの追試を行った。しかしながら、Uhlmannらとは異なり、自己客観性の知覚が生じても、雇用場面で女性を差別する(男女が同等の能力を持っていても、男性を優遇する)という結果は得られなかった。しかし、この時に、分析対象とはしなかった女子大学生で自己客観性の効果が見られる傾向があったので、女性を対象とした検討の必要性が示唆された。

この結果を受けて、成人男女を対象に、刺激や従属変数を変えて、客観性の自己知覚の影響を検討したところ、女性において客観性へのアクセシビリティが高まると男女を平等に評価するようになるという結果が得られた。一方、男性では客観性の効果は見られなかった。これは客観性の自己知覚が生じると男性が女性を差別をするようになるという仮説とは異なる結果であり、客観性がどのような働きをするのかについて今後の検討が必要とされる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

1. Morinaga, Y., Sakamoto, Y., & Nakashima, K. (2017) Gender, Attitudes Toward War, and Masculinities in Japan. *Psychological Reports*, 120, 374-382. (査読有)

DOI: 10.1177/0033294117698463

2. 森永 康子・漆谷 紗耶・小松 佳乃子・酒井 奈那・野口 由華 (2017) 自己客観性は採用決定に影響を及ぼすのか? : Uhlmann & Cohen (2007)の追試研究 広島大学心理学研究, 16, 91-96. (査読無)

DOI:10.15027/42605

3. 森永 康子・坂田 桐子・平川 真 (2016) 親密な関係における暴力の責任帰属にかかわる要因の検討 - 道徳性と支配性と恋愛様

相 - 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 65, 81 - 86. (査読無)

DOI:10.15027/41651

4. 森永 康子・小林 亮太・竹田 奈央・南谷 めぐみ・桑原 桃子・大森 麻由 (2015) 社会的比較による自己ステレオタイプ化 広島大学心理学研究, 14, 2015,11-18 (査読無)

DOI:10.15027/37494

〔学会発表〕(計 10 件)

1. 森永 康子・坂田 桐子・平川 真・柴田 侑秀・福留 広大 (2017) 道徳基盤, 社会的支配志向性, 戦争・武力に対する態度 - 30 代男性を対象にした検討 - 日本発達心理学会第 28 回大会, 2017 年 3 月 25-27 日, 広島国際会議場(広島市)

2. 漆谷 紗耶・小松 佳乃子・酒井 奈那・野口 由華・森永 康子 (2016) “我思う, 故に正しい。” 自己客観性は雇用決定に影響を及ぼすか? 中国四国心理学会第 72 回大会学部生研究発表会, 2016 年 10 月 29-30 日, 東亜大学(下関市)

3. 森永 康子・坂田 桐子・平川 真 (2016) 親密な関係における暴力の責任帰属にかかわる要因の検討 日本社会心理学会第 57 回大会, 2016 年 9 月 17-18 日, 関西学院大学(西宮市)

4. Morinaga, Y., Sakata, K., Fukudome, K., & Furukawa, Y. (2016) Benevolent sexism and mathematics aspiration of high school girls in Japan. The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, 2016 年 7 月 31 日-8 月 3 日, ウィンク愛知(名古屋市)

5. Morinaga, Y., (2016) Intimate Partner Violence in Japan. International Seminar on Family, Life Course and Wellbeing in Asia and Beyond, 2016 年 5 月 24-25 日, 中央研究院人文社界會科學研究中心(台北市, 台湾)

6. 森永 康子・坂田 桐子・福留 広大・古川 善也 (2016) 親密な関係における暴力の認識: 女子中高生を対象として 日本発達心理学会第 27 回大会, 2016 年 4 月 29 日-5 月 1 日, 北海道大学(札幌市)

7. Morinaga, Y., Sakata, K., Fukudome, K., & Furukawa, Y. (2016) Effects of benevolent sexism on math motivation in junior high school girls in Japan. The 17th Annual Meeting of The Society for Personality and Social Psychology, 2016 年 1 月 28-30 日, San Diego Convention Center (San Diego, California, US)

8. 森永 康子・中里 直樹 (2015) 配偶者間暴力の認識と自己関連変数 中国四国心理学会第 71 回大会, 2015 年 11 月 7-8 日, 山口大学(山口市)

9. 森永 康子・坂田 桐子・古川 善也・福留 広大 (2015) 「女の子なのによくないね」: 女子中学生と数学に対する意欲 日本社会心理

学会第 56 回大会, 2015 年 10 月 31 日-11 月 1 日, 東京女子大学(杉並区)

10. 森永 康子・坂本 結里・中島 健一郎 (2015) 戦争・武力に対する態度 日本心理学会第 79 回大会, 2015 年 9 月 22-24 日, 名古屋国際会議場(名古屋市)

〔その他〕

ホームページ

・<http://seeds.office.hiroshima-u.ac.jp/profile/ja.10075a3c50bc4bee520e17560c007669.html>

・<http://home.hiroshima-u.ac.jp/spsycho/>

・<https://osf.io/ucakf/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森永 康子 (MORINAGA YASUKO)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号: 60203999

(2) 研究協力者

坂田 桐子 (SAKATA KIRIKO)

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

福留 広大 (FUKUDOME KODAI)

広島大学・大学院教育学研究科・博士課程後期・日本学術振興会特別研究員

古川 善也 (FURUKAWA YOSHIYA)

広島大学・大学院教育学研究科・博士課程後期

平川 真 (HIRAKAWA MAKOTO)

広島大学・大学院教育学研究科・助教